

公開シンポジウム

「地方で医史学の花を咲かせよう」-3

江戸時代中期の讃岐の蘭方医合田強について

板野 俊文

香川大学

合田強(求吾)は讃岐国豊田郡和田浜(現香川県観音寺市)に、享保八年(1723)十一月合田吉盤の第一子として生まれた。諱は強、字は千之、通称求吾、姓は合田氏、巨鼈、鼈山、又崑陵山人、皆備堂とも号した。父祖の業を承けて医術に志し、同郡の合田又玄、高橋柳哲について、医学を修め、弱冠にしてその業を受け継いだ。しかし歳をとるにしたがって術の施し難く、学の疑いが多いことを知り、暗然として、「未だ術が足らず、識未だ開くことを得ず、良師について学ばざるべからず」と、憤然として郷里を去って、京都に出で研学へと志を立てた。時に宝暦二年の二月、先生の齡二十九歳の頃であった。京都では松原一閑齋に医(古医方)と儒学を学んだ。さらに宝暦六年江戸にて讃岐出身の望月三英につき、勉学に励んだ。

その後、宝暦十二年(1762)一月から、長崎で吉雄耕牛・吉雄蘆風兄弟に阿蘭陀医学を学んだ。この長崎滞在中の講義録のメモが5巻残されている。このメモをまとめて1冊の本にしたのが『紅毛医言』である。当時、阿蘭陀医学は外科のみといわれていたが、内科もあり、それを紹介した本邦初の西洋内科書であるとされる。またこの巻三には人体解剖図がありオランダ語と日本語を併用してある。なおこれは解体新書が発刊される12年前のことである。長崎より讃岐へ帰る途中の肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧める。この関係は紅毛医言の序に詳しい。弟に合田大介がおり、外科医として活躍した。安永2年6月1日(1773年6月1日)没、五十一歳。

吉雄耕牛の略歴

享保九年(1724)に長崎で生まれる。江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸佐衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩齋、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に出入りして、寛保二(1742)年、一九歳で小通詞、寛延一(1718)年には大通詞となった。吉雄耕牛の塾を成秀館というが、青木昆陽・野呂元丈・大槻玄沢・三浦梅園・平賀源内・林子平・司馬江漢・合田強・永富独嘯庵・亀井南冥など当時一流の蘭学者は軒並み耕牛に入門し、多くの知識を学んでいる。寛政十二年(1800)に長崎で死亡した。

成秀館における講義内容は門外不出とされたため、耕牛の著作は出版されることがなく、その内容のほとんどが手書本で残されているのみであった。そのため詳細な内容は知られていなかった。しかし、合田強の講義録は耕牛の講義を詳細に書き写したもので、当時の長崎の蘭方医学の水準の高さを示している。また、時間が許せば、合田強の末弟大介(蘭齋)や、吉雄耕牛の弟永純(蘆風)についても、お話しできればと考えている。この両名は当時の吉雄流外科術を代表する人物である。

本公開シンポジウムでは、江戸中期の讃岐における蘭方医学の受容と発展について、当時の資料を用いて解説していく予定である。